

本書「女性教育篇」下巻には「人との接し方」について実に具体的な説明が述べられている。例えば「深切」についてである。谷口雅春先生は次のように語られている。

「一切の生命あるもの、生きとし生けるもの、悉く自己一体が本来であるという事を悟つて、それに深切行を志す人たちの家が生長の家であつて、その自己一体の真理を奉戴して人に深切を行うという事が、生長の家の生き方であります」(三三頁)

人間はみな神から生まれ神の生命を宿す神の子であるから、「自」と「他」はバラバラのものではなく本来一つである。その本来一つの生命が自然と他人に働きかける行為

が「深切」であるというのである。

「深切行をするには、金持でなければ出来ないとか、或は財産を捨てなければ出来ないとかいふような、そんな難かしい、また制限のある深切をするのではないのであります。金が無くても人に深切が出来るのであります。人々が下駄を脱ぎ散らしているならば、下駄を揃えるのも一つの深切行であります。一枚の塵紙がなくて困っている人には一枚の塵紙を与えるのが深切行であります」(四頁)

「本当の深切は自己一体の意識から自然法爾に出て来るのであります。『彼』と『我』とは別れていないという本当の真理を悟つたところから、自然に深切というのが流れ出て来るので、それはちよと、高い所と低い所との区別の劃を除いたら、水が自然に流れ出て来るように、自己一体の悟によつて『自』と『他』との劃が除れたら自然に流れ出て来るのであります。既に『自』と『他』との劃がないとしましたら、

『私が』『彼に』してやったという力みはないはずであります」(六頁)

「報酬を期待して人に深切するというのは既に間違つた考で、もし報酬のない時は腹

が立ってくる、恨めしくなる。ですから、そういうふうな深切でなしに唯無我になつて私なしに相手を生かすような言葉をかけ、表情を与え、深切な念を送って相手を捧むというのが、生長の家の本当の生き方であります(二二―二三頁)

「深切」という我々が普段よく口にし耳にする言葉も、日常生活ではよく他人との葛藤を引き起こす原因となっているが、それは「深切」に対して見返りを求めているからだと言口雅春先生は説いておられる。だから「深切」とは単なる処世上の道德的徳目ではなく、「自他一体」という極めて深い宗教的真理から流れ出てくるものだと言かれるのである。ぜひ「深切」というものの本質を本書からくみ取っていただきたい。

さらに、谷口雅春先生は「人に与える雰囲気」についても述べておられる。

「御婦人の方は人に色々良い感じを与えたいと思う。そして衣裳を着飾つてみたり、上から化粧をしてみたりする人がありますけれども、いくら化粧をしましても、良き衣裳を着飾りましても、自分自身の全体から立騰る雰囲気、或はそこから波及してくるところの精神的波というのが、不完全な、淨らかでない不潔な不快なものである

限りに於て吾々は人に良き感じを与える事は出来ないであります。ですから、吾々は自分自身の「心」をして先ず高貴なる音楽を奏でる心たらしめなければなりません。外からの飾りよりも、心の内から奏で出ずる精神波動の音楽がよき音楽になったとき、吾々は初めて本当に人に好感を与える事が出来るのであります(三三頁)

「快い人になるには先ず自分自身が快い人にならねばならないのであります。自分自身から快い気を放射する。即ち不快な気持ちを起さないことが、自分から放散する念の波を淨めて、自分自身を他から悪く思われぬことにする秘訣であります(三四頁)

「表面で隠しても雰囲気は隠すことが出来ない。常に吾々はどんな人とも調和するように大調和の念波を起していない限り、誰からでも好かれるというふうな人格にはなれないのであります。人から好かれる人間になる為には吾々は絶対に人を嫌悪するような感じ、憎む感じ、怒る感じというものから離れる必要があります(四二―

四三頁)

我々が日頃から放射している雰囲気は「常に最も頻繁に吾々が心に把持していると

ころの心の状態」をあらわしている。そしてその雰囲気はその人の人相を形作る。だから、我々が明るい、光明の雰囲気と人相を持ち、相手と調和するためには、

「この肉眼に映ずる五官に顯れた良人や細君を見ないで、五官の目を閉じて、『そんな悪いものはない』と否定してしまつて、そして実相の完全円満な姿を見て『みんな神の子である』と観じて相手の実相のリズムを呼び起すようにしなければならぬのである。」(四八頁)と谷口雅春先生は論ざれているのである。

本書ではそのほかに家庭不和や病氣などについても説かれてはいるが、谷口雅春先生の教えが他の宗教と決定的に異なっている点を挙げて次のように述べられている。

「生長の家はそういうように宗教と日常生活というものと別々に離してしまわないのであります。宗教が日常生活の中に生きるようであれば本当でない。宗教とは教会で演説することではないのであります。宗教とは生きることである、こう生長の家では言っています。宗教とは生きることである。教会で説教を聴いたり、懺悔したり、祈りをしたり、そして家へ帰つて来たら、また教会で教えられた教に背いて、金儲け

のことを考えて、罪を造つて、また教会で懺悔をする快樂を味わう為に行くのが宗教ではないのであります。そういう感情の遊戯が宗教ではない。自分の生命を完全に生きることが本当の宗教なのです」(一六頁)

宗教を生活に生かし、生活そのものが宗教であると説いている谷口雅春先生の教えを再読三読して頂ければ幸いである。

令和三年三月吉日

谷口雅春著作編纂委員会